

1955年10月16日朝日新聞朝刊 ©長谷川町子美術館

サザエさんのベスト版『よりぬきサザエさん』の全13巻が好評発売中です(税込み各1080円)。ご注文は書店、ASAまで。詳細は<http://publications.asahi.com/yorinuki/>へ。

新生活運動

「サザエさん」に取りあげられる時事ネタ、1964年生まれの記事は体験したことも多いし、当時はわからなくても今ならたいがい理解が及ぶ。が、今回の「新生活運動」はて何だろう？ 運動会と間違えたカツオやワカメを笑えない。

宴会自粛や蚊・ハエ退治も

掲載作の2カ月後にも、同じテーマは登場する。仕事帰りに屋台で一杯やろうとした波平、店主に「今夜は貸し切り」と断られる。狭い屋台には「〇〇社様忘年会会場」と書かれた張り紙。それを見て「新生活運動か」と納得する、というものだ。

生活改善をめざす活動は旧農林省が主導して戦後間もなく農漁村で始まった。カマドに代表される住居の改良や季節保育所(農繁期託児所)の設置などに実績を上げた。ただ、運動は全国民を対象で、総花的になりがちだった。住環境などの改善が目に見えやすかった農村と比べ、都市部では効果も目立たない。「虚礼、飾り、贈り物の廃止」のかけ声もむなしく55年の歳末、繁華街はクリスマス、歳暮商戦でにぎわった。

運動に情熱を注いだ人物がいた。鳩山内閣に基本方針を答申した文部省審議会議員で、新生活運動協合理事も務めた安積得也さん(1900-94)だ。旧内務官僚で戦時経済統制の立案に携わったり官選知事を務めたりした。一方、平和主義に徹するキリスト教クエーカー派(フレンズ派)に親しみ、後に入信した。

新聞も盛んに報じた。虚礼廃止、青少年不良化防止、蚊・ハエ撲滅、役人の接待マージャン禁止、そして企業などの宴会自粛……。一言でいうと「物心両面での国民生活の改善、向上」をめざした国民運動で、54年末に発足した鳩山一郎内閣が公約に掲げた。翌夏、政官財界、学識経験者ら100人以上を首相官邸に集めて会合を開き、運動をアピール。推進母体の新生活運動協会が発足したのが今回の掲載作のころだ。

運動の成果の一つとして「話し合いの浸透」を挙げるのは、『新生活運動と日本の戦後—敗戦から1970年代』の編著書がある大門正克・横浜国立大学教授だ。新生活運動は上意下達の官製運動ではなく、あくまで民間主体と強調された。「戦後の国家再建にあたって、自らの生活を自ら律する、真に自立した国民を育てなければ」という意識が、背景にあった」と大門さんは言う。課題や目標は上から示されるのではなく、地域での話し合いで決めるよう奨励された。「権威主義、男性中心主義は

簡単に変わらなかった。とくに女性たちが集まってものを言うこと自体、あまりないことでした」

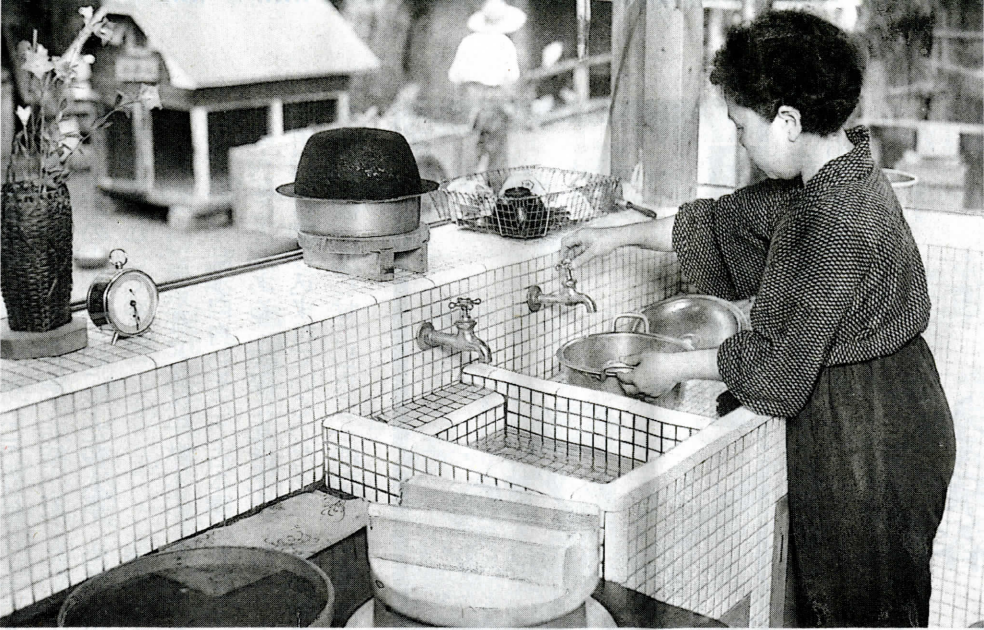
運動に情熱を注いだ人物がいた。鳩山内閣に基本方針を答申した文部省審議会議員で、新生活運動協合理事も務めた安積得也さん(1900-94)だ。旧内務官僚で戦時経済統制の立案に携わったり官選知事を務めたりした。一方、平和主義に徹するキリスト教クエーカー派(フレンズ派)に親しみ、後に入信した。

長男で元国際基督教大教授の仰也さん(88)は「いつもにこにこ、いばらない人」と思い出す。詩人、文筆家でもあった。27年に作った「道の国日本」と題する詩がある。

日本があるおかげで／世界は何と楽しいか／日本があるおかげで／世界は何と興隆の気力に充ちているか／そんな国に日本をしたいなあ

敗戦直後に岡山県知事となった得也さんは公職を追放され、聖書や仏教典を読みふけり「人間の原点に立ち返ることが出来た」と著書にある。追放が解かれ取り組んだ新生活運動に得也さんが込めた願いは、いま実現しているだろうか。

(大庭牧子)



「さしずめアベノミクスみたいな感じで取りあげられたのでしょ」と、運動を研究した田中宣一・成城大名誉教授は話す。流行語でありながら、中身を正確に把握する人は当時から少なかつたと推測する。

農村部で蚊とハエを退治した新生活運動のモデル地区では、台所を清潔なタイル張りにし1955年、群馬県

「さしずめアベノミクスみたいな感じで取りあげられたのでしょ」と、運動を研究した田中宣一・成城大名誉教授は話す。流行語でありながら、中身を正確に把握する人は当時から少なかつたと推測する。

「さしずめアベノミクスみたいな感じで取りあげられたのでしょ」と、運動を研究した田中宣一・成城大名誉教授は話す。流行語でありながら、中身を正確に把握する人は当時から少なかつたと推測する。

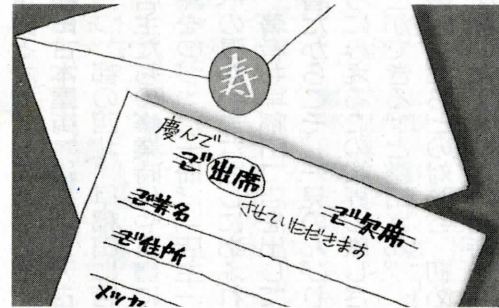
ことばの食感

中村 明

敬語の人間性

自分の文章に他人の名前を引用する時、厄介なのは敬称だ。歴史上の人物は遠い存在なので敬称なし。「紫式部女史」「徳川家康殿」と書く人はいない。著名な政治家や芸能人なども敬称をつけたい。作家でも「漱石先生」「志賀直哉氏」「川端さん」などと書く個人を知っているよう書き添へる。学者の場合には「教授」と書く

人もあるが、まだ「准教授」だったりで「名誉教授」になっていたりするので現状を確認しないと危ない。改まった文章ではすべて「氏」、軽い文章では「さん」で統一したいのだが、直接教わった先生は対等な「さん」だと無礼な感じがとがめる。結局、硬い文章ではすべて呼び捨てにして、必要があれば末尾に「敬称省



イラスト・麻柴朋貴

略」と記し、軽い文章では日常会話に合わせることにしている。

返信用のはがきで返事を出す場合は、宛名の「行」を「様」に直し、自側の「おところ」「芳名」の「お」「芳」を消して出す。

昔、国語関係の学会の事務局でその常識を調査したら、欠席の場合だけ学者らしからぬ惨憺たる結果になった。敬意表現は知識だけでなく態度も反映する。要は人間性が問われているのだ。

(早稲田大名誉教授)